

福竜丸だより

都立・第五福竜丸展示館ニュース



発行 (財)第五福竜丸平和協会 〒136 東京都江東区 夢の島3-2 都立第五福竜丸展示館内 電話 03-3521-8494

先日、伊勢丹でおこなわれていたベ
ン・シャーン展を見にいき、ラッキー
ドラゴンの絵にふれてあらためて感動
をおぼえた。

かつては日本人の核アレルギー体質
などといわれたりもしたが、最近では
チェルノブイリをはじめ、世界の各地
で核被害の問題がとりあげられるよう
になり、世界の人の考え方も大き
く変わったようだ。第五福竜丸展示館
の存在意義にも新しい要素が加わった
といっただろう。

広島・長崎原爆の一千倍もの威力を
もつ水爆の出現は、人類の存亡の問題
をわたしたちにつきつけた。ピキニ水
爆実験被災事件はそれを象徴する出来
事だった。

事件当時大学生だったわたしは、本
郷キャンパスで級友たちと原水爆禁止
の署名をいっしょけんめい集めにま
わったり、五月祭への出し物として原
水爆展の工夫に熱中したのを、いまで
もはっきりとおぼえている。物理学科
の学生として、原水爆の意味について

あるていど理解でき、学生なりに自分
たちの役割と責任を考えるところがあ
ったからであろう。

第五福竜丸展示館はことし十五周年
を迎えるが、これは文字通り下からの
努力でつくられたものである。それを
草の根の運動でささえられた方がたや
その願いにかたちをあたえ行政との折
衝にあたられた故三宅泰雄初代会長を
はじめとする識者たちのお骨折は、並
々ならぬものがあつたと察せられる。

展示館は美濃部知事の時期に設立さ
れ、鈴木知事のもとでも手厚く扱われ
船体や建物の改修で相当額の予算を出
していただき、こんにちに至っている。
諸外国には戦争や歴史に関する博物
館あるいは海賊船展示館(ノルウェー)
など、いろいろあるが、その目的は、
それぞれの国の文化遺産を大切にし、
そこをおとすれた人びとが過去をしの
び現在への教訓をひき出すことにある
と思われる。

わたしたちの展示館は、未来におい
て全人類が進むべき方向といまのわた

したちをつなげてくれる、世界にふた
つとない展示館である。

第五福竜丸展示館は、発展しつつあ
る国際都市、東京にまことにふさわし
い存在であり、世界平和にはかりしれ
ない貢献をしている。

最近、夢の島公園全体が整備され、
交通の便もよくなったため、設立当初
は予想もつかなかったほど来館者がふ
えている。休日には気楽におとすれる家
族づれ、若いグループ、二人づれなど
のほか、海外からの方もときどきお見
えになる。とりわけ、小学校の社会科
見学、中学・高校の修学旅行でのグル
ープ見学が多くなっている。

近ごろ当代の大学生の気質について
語られることが多く、わたしも自分の
まわりをみてがっかりすることもない
わけではないが、展示館へこられる小
・中・高生の顔や感想文をみて救われ
る気持になる。

来館者の増加によっていまの展示館
はたいへん手ぎまになり、展示館で事
務をとる当協会職員一同うれしい悲鳴
をあげている。見学者のための視聴覚
ルーム、福竜丸に関する資料、文献の
展示・閲覧・保存のスペースなど、東
京都の担当者におねがいしていること
である。

(第五福竜丸平和協会会長)

事業報告、決算を承認。評議員・顧問を選出

協会理事會開く

五月二十八日、東京の学士会館
で協会の第一〇三回理事會が開か
れ、一九九〇年度の事業報告、決
算、監査報告を承認しました。
事業報告の中では、展示館来館
者の引き続く増加と修学旅行での
見学、事前学習を進め、感想文集
などを持参する学校が多くなつて
いる傾向を高く評価、説明と展示
内容の充実に一層力を注ぐことに
しました。開館十五年で初めて行
なわれた展示館の本格的修理によつ
て、より良い条件で来館者を迎え
入れることができるようになった
ことを喜び、今後も事務室の新設

はじめ、拡充の計画について東京
都との連絡を密に要望を行なつて
いくことにしました。
理事會ではまた、二年おきに改
選される評議員・顧問の選出を行
い、二十名の評議員、五名の顧問
について就任を委嘱していくこと
にしました。

すずらんの花や、四部合唱

五月、つぎつぎと来館する和歌
山県紀南の七十校余の中学校。修
学旅行の印象深い思い出にと、折
り鶴や事前学習の感想文集、作文
を持参し、平和宣言を発表し、平

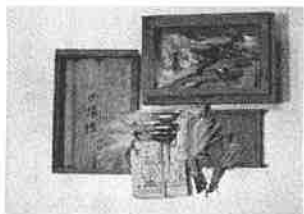
映画『第五福竜丸』をみる

田城 悟史

第五福竜丸に乗っていた人たちは
は、水爆の灰をかぶって放射能に
苦しめられていた。船がいた所は、
実験の場所よりだいぶ離れていた
のに病気がかかった。そして爆弾
を落とされたときの煙やその後の爆
風などは、映画で見てでもすごい
威力だなあと考えた。それほど怖
いものなのだと思った。

だとは分かった。灰をかぶると黒い
のがとれないのはなぜか分からな
かった。
日本に第五福竜丸が帰ってきて
から大きく報道された。ピキニ島
に落ちた水爆を受けたということ
も分かった。アメリカが実験をし
なければ何も起こらなかったのに
なあと思う。灰をかぶって病気に
なった福竜丸の人たちはかわいそ
うだ。戦争に使われるための兵器

で、久保山愛吉さんは殺された。
他の二十二人の人たちも被害を受
けていた。それは残念だし腹の立
つことだと思ふ。日本の医師は一
生懸命に努力した。けれど助から
なかったのは残念だった。
放射能の病気が完全に治るよう
になつてほしい。兵器もなくな
ければならない。それは、世界平
和にもつながっていく。核兵器は、
早く世界からなくなつてほしい。
(和歌山県串本町
和深中学校三年生)



た名前が強い
印象を与えま
す。船で使わ
れてきたさま
ざまな日用品
と共に、船の
まわりのケ
スにいま、展
示されていま
す。

和のセレモニーをひらくなど、
熱心な見学でいっぱいでした。
串本町の和深中学校は、映画「第
五福竜丸」を見ての感想文を二十
人みんなで書き「本物もすごい」
を連発。感想文集の中には、海岸
戦争、原発事故のことを考えるも
のもありました。また、スライド
「太陽が落ちた」を見ての感想文
を二百人全員が原稿用紙一枚ずつ
書きしるし、一冊の文集にして贈
ってくれる中学校もありました。
宮城県の富岡中学校(二十三人)
は今年も久保山愛吉記念碑横にす
ずらんの苗を植え、三重県の多気
中学校(二百人)はカンタータ「大
地」を四部合唱で響かせ、京都の
勧修中学校は生徒の代表が平和の

決意を読み上げるなど、さわやか
な心に残る見学でした。
高校生の見学もあいつぎ、六月
になって、目黒区の日出女子学園
高校、川崎市の百合丘高校それぞ
れ五百人以上が来館しました。

玉手箱のような道具箱

父親が名前を書いてくれた道
具箱です。第五福竜丸の乗組員
だった小塚博さんから、海の匂い
の詰まった「道具箱」が届けられ
ました。同じ乗組員の大石又七さ
んを通して贈られたもので、木製
のがっしりした長方形の小箱の中
には、大小さまざまな釣り針や羽
飾りのある擬似餌針がぎっしり。
当時使っていたままのものとか
で、汗がしみ込み、あちこちにひ
かき傷が残っていても、大切な大
切な玉手箱のような感じでした。分
厚いふたの裏に肉太の筆で書かれ

広島・長崎市長のメッセージ

長崎市長 本島 等

このたび(財)第五福竜丸平和協会の設立十八周年並びに第五福竜丸展示館十五周年を機に長崎市民を代表してメッセージをお送りできますことを大変光栄に思います。

水爆実験の犠牲となりました第五福竜丸の事件は、放射能が人体にもたらす脅威を改めて全国民に知らせ、原水爆禁止を求める市民運動の契機となりました。

原爆被爆の惨禍を被った長崎市民も戦後一貫して核兵器廃絶と世界恒久平和を訴えてきましたが、地球上には人類を絶滅させるに余りある核兵器が五万発以上も貯蔵、配備されているのが現状であります。

世界では、米ソを中心に核兵器の削減交渉が続けられていますが、核兵器の性能向上を目的とした核実験は私たちの抗議も空しく繰り返されています。また核実験が周辺地域に及ぼす環境汚染の問題も深刻となっております。

核兵器は、人々が何百年もの年月をかけて築いてきた文化、財産、

そして人命を瞬時に奪う恐ろしい兵器です。私たちは、世界の人々と宗教、イデオロギー、人種などの壁を乗り越え一致団結して核兵器の廃絶に取り組みなければなりません。

この点からも第五福竜丸展示館は、水爆の恐ろしさを人々に伝えるうえで大変貴重な施設であり、毎年たくさんの方々が訪れておられます。展示館を見学に訪れていると聞いていますが、次代を担う子供たちが原水爆の脅威を知り、市民一人一人の力による原水爆禁止運動の一役を担いますことを期待いたします。

「原水爆の被害者は私を最後にしてほしい」との久保山さんの遺言を肝に銘じ、私たち長崎市民は第五福竜丸平和協会の皆様と共に核兵器廃絶と世界恒久平和の実現に向けて取り組んでいきたいと思っております。

最後に(財)第五福竜丸平和協会の皆様のご健勝と今後益々のご活躍をお祈り申し上げます。私のメッセージといたします。



広島市長 平岡 敬

財団法人第五福竜丸平和協会の設立十八周年と第五福竜丸展示館の開館十五周年を心からお喜び申し上げます。開館以来今日まで、第五福竜丸をおして核兵器の廃絶と世界平和を訴え続けてこられた関係者の皆様方の御努力に対し、深く敬意を表します。

人類史上はじめて、水素爆弾による被害を受けた第五福竜丸の保存は、世界に一つしかない人類の貴重な遺産であると同時に、人類への警鐘としていつまでも後世に受け継がなければならないものであり、誠に意義深いものと存じます。

ヒロシマは、本年、被爆四十六周年を迎えようとしております。しかし、たとえ年月が経過しようとして、あの悲惨な情景は今なお脳裏にあって、消え去ることはありません。私達は、これまでの間に地球上で再びこの悲劇を繰り返さないため、被爆の実相を国内外に知らせ、一貫して核兵器の廃絶と世界恒久平和の実現を願う「ヒロシマの心」を訴え続けてまいりました。

御承知のとおり、昨今の国際情勢を見渡しますと、昨年の戦略兵器削減交渉(START)の基本合意、ワルシャワ条約機構の崩壊と欧州通常戦力の削減など、ようやく軍縮、核兵器削減に向けての兆しが見えたと期待したところであり、しかしながら、先の中東湾岸戦争では、核兵器や生物化学兵器の使用を予感させられるなど、現実には核をめぐる国際情勢は依然として厳しく憂慮すべきものがあります。

私達は、今後とも手をゆるめることなく、あらゆる機会を通じて繰り返し核兵器廃絶と世界恒久平和の実現を、国の内外に訴え続けていかなければならないと存じます。

このような中で、第五福竜丸の保存・展示は、まさに平和を願う人々の声であり、誠に意義深いものであります。

最後になりましたが、第五福竜丸展示館開館十五周年記念集会の御成功と第五福竜丸平和協会の益々の御発展をお祈り申し上げますとともに、一日も早く核兵器が廃絶され、真の世界平和が実現されることを願ひ、御挨拶といたします。



いる原水爆禁止運動は力強いものになるのではないかと期待をかけた。

ラッセル平和財団支持運動に少しくわしくふれると、東京でも五つの支持者グループが生まれ、一九六四年四月、前に述べたラッセル平和財団支持者連絡協議会を設立した。そのニュース一号には、各地から賛同の手紙や小川岩雄先生のご意見が、二号には故三宅泰雄先生と会員との対談が、三号には「何とか統一を」という私の小文が載っている。

一九六四年八月には、ラッセル卿の代理で来日した財団理事のクリストファー・ファレーリー氏を囲

支持者協議会が発行した「平和シール」六号。「全体的破壊を」のラッセル・アインシュタイン宣言の結晶化された言葉が日英両文で書かれた。

んで学士会館で盛大な集会が行なわれ、明るい未来を思わせる幕開けであった。ニュースの発行も例会も毎月順調に進められた。

ベトナム戦争が激しくなり、一九六五年二月には、アメリカの北爆停止への「ラッセル・アピール」が出され、日本のベトナム反戦の動きも高まった。

支持者協議会は、七月に開かれるヘルシンキ世界平和大会にむけて、「ベトナム戦争解決への提案」を発表し、日本代表に託した。

ところが、大会に出席した財団本部の理事ラルフ・シエンマン氏の演説は、アメリカを痛烈に非難し、アメリカ軍撤退の具体的な強硬手段を提案したもので、支持者協議会の提案とは相入れず、協議会は早速ラッセル卿に質問状をだした。

協議会の質問の骨子は、「南ベトナム解放軍およびベトナム民主共和国も、アメリカ軍の全面撤退後でなければジュネーブ会談のような国際会議は問題になり得ないという態度を固執することなく、なにはともあれ停戦の話し合いに応ずべきで、シエンマン氏の演説は財団本部の基本的原則を越え

るものではないか」というものであった。

基本的原則とは、ラッセル・アインシュタイン宣言のことで、「全体的破壊を避ける」という目標は他のあらゆる目標に優先せねばならぬ」という言葉に結晶化されている。

質問状へのラッセル卿の返書は「シエンマン氏がヘルシンキで述べた若干の点は財団の公表目的の埒を越えており、彼個人の見解である。しかし、それよりもっと重要なのは、支持者協議会と財団本部との政策に関する相違です。われわれは話し合いをはじめめる前に、アメリカがベトナムの領土から撤退しなければならぬ」と述べました。私の理解するところでは、皆さんはそれは到底アメリカが受け入れそうもない空想的要求だと考えています。もし皆さんがこの

点で正しいとするなら、われわれの要求は戦争を避けようとする財団の最高目的に反することになります。この問題について私自身の気持をいえば、アメリカがベトナム領土内に残っている間に話し合いをするのは、民族解放を希望するあらゆる人々の観点からはど

うしても不満のものになりましょう。同時に、もし、アメリカがたとえその軍隊をベトナムから撤退する前にでも、誠実な話し合いを始めようとする意向を示すような事態が生じたのであれば、私はいやながらであるけれど、この点で譲歩するつもりです。しかし、私がこうした譲歩をするのは、アメリカは公正な平和を不可能にしてしまった。そしてわれわれは大戦争を避けるためにだけ、不正に膝を屈するのだということをはっきりさせた上でのことです。…」

というもので、戦争を避けるための柔軟な姿勢をくずしてはいなかった。これに対して支持者協議会の中では意見はまとまらず、行動は停滞していった。

また、平和財団日本協力委員会はニュース・レター三号を発行して活動を終えている。

結論論的というなら、このような具体的な問題が起こったとき、大切なのは、ラッセル・アインシュタイン宣言をどのように理解するかであって、宣言を書いたその人——ラッセルの思想および行動にどこまで共鳴できるか否か、の違いであると私は思った。(協会理事)

大石又七さんの手記

工藤敏樹

私が第五福竜丸と初めて出会ったのは、一九六六年、ビキニでの被災から十二年たった秋のことで、場所は東京都港区港南にある東京水産大学の岸壁でした。

当時、TVのディレクターだった私は、ドキュメンタリー番組の制作中で、この船と出会ったのは全くの偶然でした。しかもそのときの船名は、東京水産大学の練習船「はやぶさ丸」で、老朽化がひどく、廃船の申請さえ出されていました。

この時、その船上で交わされた「この船はビキニで……」とか、「放射能がバリバリ」という会話を耳にしなかったら、船はいまごろどうなっていたか、思いおこすと感無量です。

翌年も私はスタッフとともに、この船がこれからどうなるのか、乗組員の消息とともに取材を続けることにしました。大石又七さんとは、九月二十三日、久保山愛吉

さんの命日に、焼津市の久保山すずさんのお宅ではじめて会いました。

第五福竜丸は、その後夢の島に曳航され、ゴミとヘドロの中に放置されていたのですが、たくさんの人たちの努力で沈没をまぬがれ、一九六九年、ようやく「第五福竜丸保存委員会」が発足しました。

年表風に書けば数行ですが、ここに至るまでには、多くの人たちがいかに苦勞されたか、当時の資料やメモを見てあらためて痛感いたします。

私は今でも、保存委員会の代表委員だった中野好夫氏が、「この船を原水爆禁止のシンボルと同時に、分裂したままになっている原水爆禁止運動の統一のシンボルとしても、永久に保存しよう」と訴えられた姿を忘れることができません。

そのころ大石さんは、同じ乗組員だった鈴木隆さんとこっそり夢

の島を訪れ、変わり果てた船の姿におどろきます。

奥さんと二人の小さなクリーニング店で、アイロン台に向かう大石さんが、仕事の合間をぬって世の中に向けて発言し始めたのはそれからです。自分の心の底にある思いを、自分の言葉で伝えたい。文字に残し日本中の人たち、とくに母親や中学生、高校生に読んでもらいたい。大石さんは鉛筆を握ります。しかし、その間にも仲間はずれに発病します。

その鈴木隆さんもふくめて八人の元乗組員が、四十代、五十代という働き盛りの年齢で世間に知られることなく、あの世へ去ってしまいました。

大石さんの手記には、自分を育ててくれた駿河湾や、ともに被爆した仲間たちに対する、やさしいおもいがあふれています。

私は、第五福竜丸がきっかけで大石さんたちと出会い、そして二十五年後の今、取材者の立場をなれて、大石さんの手記をまとめる仕事を手伝うことになりました。

大石さんの言葉によれば、あの日以来大石さんは、核の中から外を見るようになった、といえます。



夢の島の廃船「はやぶさ丸」 撮影・森下一徹

それだけに、いわれなき被爆に対する怒りは痛烈です。

展示館の方がたの努力により、第五福竜丸を見学する人びとの数も、年々増えていると聞きます。

そうしたみなさんにも、ぜひ二十三人の元乗組員に代わって、はじめて世に訴える大石さんの手記を読んでもらいたく、心から思います。(大石又七さんの手記「死の灰を背負って」は、七月に新潮社より刊行される予定です)

△元NHKディレクター▽

平和を求めて(三)

ラッセル卿への手紙と
平和財団支持運動



齋藤 鶴子

一九六二年十月三〇日付で私がラッセル卿に書いた手紙は大凡つぎのような内容であった。

「：すべての国の原水爆を禁止することを私は熱望しています。いうまでもなくすべての国の核実験に反対せねばならないと思います。しかし、日本の或る人々はアメリカの核実験とソ連の核実験を区別すべきであるといっています。個々の場合、各々に理由はあっても、人間に害のあること、軍拡につらなること、力の政策などの意味を含めて私はやはり区別すべきでないと思います。私は何とかこれらの人たちと理解し合ってゆきたいと思います。このことについてどのようなお考えでしょうか。次は日本の基地反対運動について

です。或る人々は基地反対運動は平和運動の立場から正しくないといっています。しかし、私は核戦争準備のためのすべてのことに反対せねばならないと思っています。もしあなたが日本人でいらっしやうならば基地反対にどのような行動をおとりになるでしょう。…英文がつかなく、不十分と思いますが、できる限り単純化した文章にしました。

同年十二月七日付でいただいたラッセル卿からの返書は単純明快で、

「：すべての核実験は即時やめるべきこと。ソ連とアメリカの死の灰を区別することは間違いであること。核基地に反対することは第三次世界大戦を避ける運動として欠くべからざること。もし、日本人であったら核基地の存在に反対することが特権であり、義務である。…」というものであった。

一九六三年、第九回世界大会が終わり、原水爆禁止運動はとうとうゆきつくところまでゆきついたという感じがした。

水爆禁止署名運動から発展し、人類の生命と幸福を守るうとして立ち上がり、原水爆禁止を訴えて

運動をする中で、それは政党の争いの場となり、国際間の平和運動の影響をうけ、当初のヒューマンズムの精神からかけ離れたものになってしまったと私は思った。

原水爆禁止運動の分裂やベトナム戦争の拡大が影響してか、平和運動をめざすいくつかの市民組織や集会が生まれた。私がかかわったものだけ考えてみても、アメリカの一主婦からはじまり国際的になったWISPの呼びかけにこたえて「政治的立場や思想信条を越えて核に反対、核戦争に反対してゆこう」という個人参加の「平和のために手をつなぐ会」が一九六二年に。翌年は、原子力潜水艦寄港をめぐって学習会や抗議行動が行なわれた。当時と比較を越え拡大した核兵器や原発など「核」の現状にひとは憤らされてゆくことのおそろしさを感じる。

ベトナム戦争が激しくなると「ベトナムに平和を！市民連合」(ベ平連)が一九六五年に生まれた。またこの年から八月十五日、武道館で行なわれる政党主催の戦没者を追悼し賛美する集会に抗議して、戦没者の真の追悼は日本国憲法の立場にたって再び戦没者を出さぬ



支持者協議会のニュースなど

ことであるという反戦集会が、国民文化会議主催で九段会館で行なわれ、現在も続いている。

一九六三年秋、私はバートランド・ラッセル平和財団設立に際し、本部から協力依頼の手紙を受け、喜んで支持した。翌年三月、雑誌「世界」に日本に支部をつくってほしいとラッセル卿のよびかけがあり、ラッセル平和財団支持者連絡協議会が発足し、私は呼びかけに応じた。翌一九六五年、湯川秀樹さんをはじめ著名な学者・文化人二四名で、ラッセル平和財団日本協力委員会がつくられ、ニュース・レターを発行した。

私は、この二つが緊密な連絡をとりながら提携して運動を繰りひろげてゆくなら、日本の低迷して